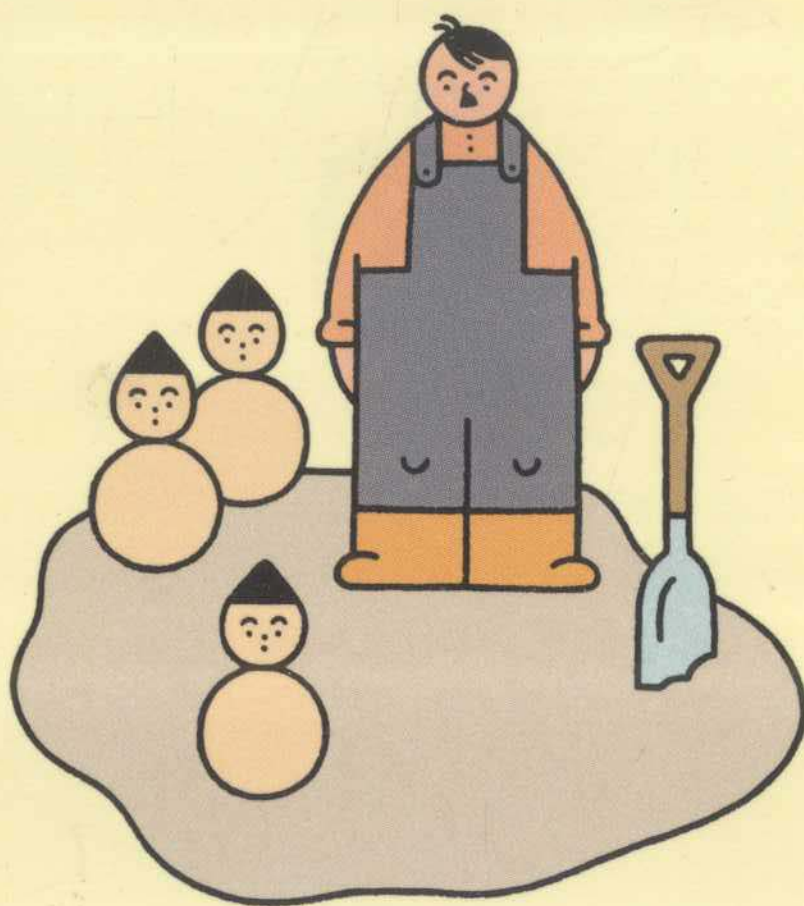


人間関係のストレス解消に

読むクスリ

PART 10

上前淳一郎



文春文庫



文春文庫

読むクスリ PART10

定価はカバーに
表示してあります

1992年2月10日 第1刷

著者 上前淳一郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-724817-4

江苏工业学院图书馆

讀むクスリ
蔵書章
PART 10

土前淳一郎



文藝春秋

読むクスリ
PART
10
／
目次

流れをとらえる……………9

◆ささやかなきっかけ 10

ただ今お話し中／カード時代の鍵／だまし香／泥棒に追い球／知恵くらべ／
へビかあちゃん

◆先んずる 32

夜明け前の着想／一日一驚のすすめ／頭の中のVIP／こういう時代／半返
し

◆時代を読む 53

ガラス張り／いびき防止器／アカシアの雨／判じもの企業版／懐かしき故郷
の木

人を知る……………79

◆もうひとつの目 80

お尻と美術／患者の椅子／「困ります」合戦／手鏡

◆因果はめぐる 94

因縁／八づくし／ハネムーン／緩やかに走れ／会長室の魚

◆優しい人たち 111

社長は簪之守／百万ドルのキス／過去／濡れ衣／悲しき終バス／一発波のこ
わさ

地球を駆ける……………

139

◆思いがけない発想 140

幕の内の空箱／かっぱれ葬送曲／子に教えられる／上を向いて歩こう／ひよ
うたんから駒

◆東の空・西の空 160

象乗りポロ／猿の欲張り／油の成る木／政治家の心理／南海版ドレミの歌／
夏炉冬扇／その踊り、買った

◆とっさの場合に 177

罪と罰／鬼のような美女／ジョークバーガー／笑いの押し売り／古い職業
つれづれに……………

197

◆知るよろこび 198

セーラー服由来／アイスコーヒー讃／十万円コーヒー／落とし話／地球は丸
い／大正十六年

◆生きものにまなぶ 216

イルカの学校／ハナの話／ウグイス百声／一宿の恩義／母と子／食べごろ／
守り神／究極のペット恐竜

◆からだの神秘 246

匂いは気から／旧人類はなぜ短脚／脳の出張所／二十秒の集中／練習

あとがき 261

登場する会社名・肩書等はすべて
単行本刊行時のものです。

読むクスリ
PART
10

題字 東 君平
本文カット 桑原伸之

流れをとらえる

◆ささやかなきっかけ◆



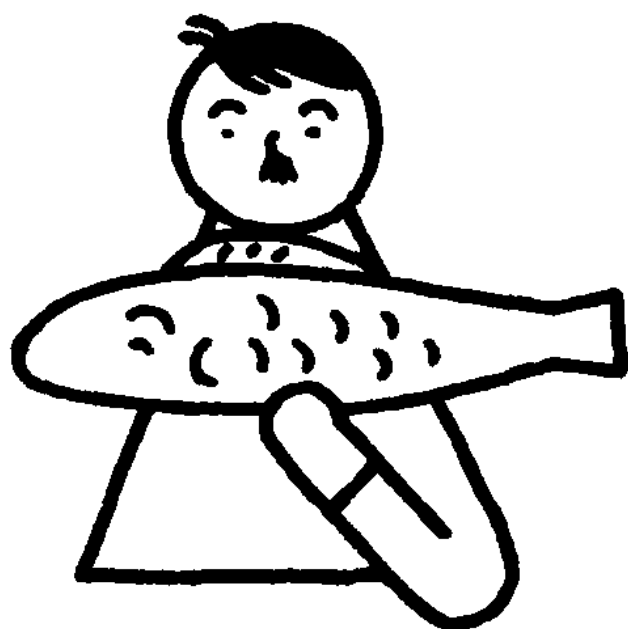
ただ今お話し中

東京では、およそ業種としては分類できないようなニュービジネスが花ざかりで、なんでも商売のタネになる。

新橋・鳥森口近くに出現した「お話しルーム」もその一つ。何も売るわけでなければ、サービスがあるでもない。

客はただ、ルームの女主人に向かってしゃべり、日ごろ胸につかえていたストレスを吐き出して帰って行く。

その吐き出し料、三十分五百円。四時間ぶっ続けに吐き止めない客もいて、女主人は休む暇もない。大繁盛なのである。



*

女主人は田島令子さん。五十歳を少々過ぎていらっしゃるが、少女っぽい髪と、絶えることのない笑顔とで、うんとお若く見える。

「二度結婚と離婚をいたしまして、子供はそのつど二人ずつでございます」

それだけで十分な人生経験といえるが、五年ほど前、父の急死で辛酸をなめた。

魚屋から身を立てた父は、函館にホテルと乳業会社を経営する事業家として成功した。ひとり娘だった令子さんは、蝶よ、花よと育てられ、東京の高校へ行きたいという希望も叶^{かな}えてもらった。

成人すると父のホテルの取締役に加えられ、新橋に東京営業所が置かれたときその所長格になる。

「ところが父が死にましたら、愛人とその子供という人たちが現われ、父の事業は乗っ取られてしまいました……」

令子さんはおっぽり出される。あまりの口惜しさに、愛人の目の前で面当てに首を吊ってやろうか、とまで思った。

夜も眠れないで、あれこれ考え、悩む。そのうち、ふと思いついた。

「こんなふうにとりで悩んでいるのは、きっと私だけじゃないはずだ。それなら、人生のい

ろんな悩みを持つ人に来てもらって、お互いに話をしたらどうだろう」

ホテルの東京営業所だったところに「お話しルーム」の手書き看板を掲げた。

人生相談所みたいな暗い感じにはしたくない。もともとが楽天家だ。相手の話を明るく聞き、ぱっ、とひらめいたアドバイスをしてあげられたら、と思ってインスピレーション・アドバイザ―と名乗ることにした。

商人の家に育っただけに、店開きするからには無料にするつもりはなかった。だが、人の孤独な心につけ込んで大儲けする気もない。

三十分五百円の料金は、あたりのビジネス・ランチの値段をにらみながら、このくらいならサラリーマンも払う気になるだろう、と決めた。

*

八畳ほどのルームには、テーブルと椅子が二つだけ。殺風景なものだ。

客に渋茶一杯出すでもない。お互い咽喉が乾いたら、近くの自動販売機で何か買ってきて、話を続ける。

それなのに、周りのビジネス街のサラリーマン中心に、ぞくぞく客が来る。

「四十代、五十代の管理職の方が多いですね。大企業の立派なビジネスマンも少なくございません」

名前などはいっさい聞かない。黙って入ってきた相手に椅子をすすめ、

「今日はどんなお話ですか」

とにこやかにうながすと、堰^{せき}を切ったようにしゃべりはじめる。

仕事のこと、職場の人間関係の悩み、家庭と夫婦仲……。

これまでに誰にも聞いてもらえず、積もりに積もっていたストレスが、一気に吐き出されてくる。

「この年代の男性は、仕事と家庭の両方に悩みを抱えて、大変だなあ、と思わされます。家庭での悩みは、たいてい奥さんがつくってるんです。それを奥さんは気づかず、ご主人が一人陰で悩んでるんでございますよ」

令子さんは相手の立場になって真剣に、だが、あくまでも明るく話を聞く。そして、アドバイスになりそうな言葉を選んで、こちらからも話しかける。

「商家に育ちましたから、人の心理を見抜くのはうまいんです。児童劇団にいたこともございまして、演技が必要だな、と思うときにはできてしまいます」

三十分たったころ相手は、

「やっぱり、話してみるもんですねえ」

と、すっきりふっ切れた顔で立ち上がる。

必ずしもアドバイスが役に立ったわけではないだろう。しゃべって吐き出したことが、カタルシスになるのだ。

しかも、バーのママに愚痴をこぼすより親身に聞いてもらえて、精神科医に相談するよりうんと安い。

*

電話予約も受け付ける。接客中は表に「ただ今お話し中」の看板が下げられる。

三分の二が男性客で、あとはOLだが、美容院や占いでなれているせいか、彼女たちのほとんどは予約してくる。

「OLの方たちから恋愛の相談はほとんどございません。そんなことで女性が悩む時代ではなくなっただすねえ。職場の人間関係が多うございます」

常連客は新しい悩みが起きるたびに、電話をかけてくる。来客中でないかぎり令子さんは、電話相談に乗る。

商売繁盛と見てとって、

「私も会社をやめて、こういう人生相談をしたいんだが」と相談に来る人も、少くない。

むろん令子さんは、どんな相談にもいやな顔ひとつしないで応じる。



カード時代の鍵

「車の中にキーを置いたまま、ドアをロックしちゃったんだよ。開けに来てくれんかね」

シカゴ郊外のフォード販売店に二十五年勤めるD・アルムブラッド氏は、客からの電話で呼び出された。

またか、と思った。うっかり車から閉め出される客が年に何人もいる。そのたびに、金にもならないのにドアを開けに行つてあげなければならない。

この、うっかりトラブル防止のため、エンジンキーを差したままではドアがロックできない新型車もお目見得している。

しかし、それだって、抜いたキーを車内に置き忘れたり、外で落としてしたりしてスペアキーを持っていなければ、閉め出されることに変わりはない。

「いやあ、急いで行かなくちゃならんところがあつたんだが、遅刻だ。まずいことになつちまつた」

開けてもらった礼をいうのも忘れて客はこぼし、なおも苦情をいった。

「たいていのことはクレジットカードで代用できる時代だ。車のキーもなんとかならんかね。」